

## 「正義の暴走」とファシズム

田 野 大 輔

甲南大学教授

みなさんこんにちは。

もっと大きな声でお願いします。みなさんこんにちは。

この声を出しての挨拶、大学の講義でも毎回やっているんですが、これをやると学生が授業に取り組む積極度が全然違ってきます。本日の講演でも、私が大学の授業で10年ほどやってきた「ファシズムの体験学習」についてのお話をしますが、そこにもこの声を出しての挨拶が出てきます。覚えておいてください。

本日のお話は「正義の暴走」とファシズムということで、先ほどの導入の説明でも触れられていましたが、コロナ禍のもとで自粛警察などといった不寛容な行動が目立つようになっていますので、その意味ではタイムリーな話題かもしれません。

実は私自身、そういうバッシングを受けることがよくあります。普段からツイッターをやっていて、フォロワーが1万5000人くらいいるんですが、ちょっと反感を買いそうなことを書くとなぐに炎上します。最近もある話題で炎上しまして、そういう経験からも、今日お話する「正義の暴走」とファシズムの問題は大事だと考えています。私はファシズムやナチズムの問題を専門的に研究しているんですが、普段使っているツイッターでも似たような問題に直面しているわけですし、研究と日常生活がリンクするような、そういう体験をしています。

本日の講演の内容を目次にまとめましたが、まず最初に導入としてこういった個人的な体験に関わる「隔離メシ騒動」の話をしていきます。

次に、「自粛警察」の話をしていきます。昨年から世界中でコロナが広がって、とくに日本では「自粛警察」と呼ばれる過激なバッシングの動きが強まっていますが、そうした動きがどうして生じるのか、それは一種のファシズムじゃないのか、そういう話です。

次がメインの内容なんですが、私が過去10年ほど勤務先の甲南大学でやってきた「ファシズムの体験学習」という授業の話です。この授業については、2020年に『ファシズムの教室』という本を書きまして、わりと広く読まれているようですので、もしかしたらご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、その授業でどういうことがわかるのか、ファシズムの仕組みとはどう

いうものか、それと先ほど触れた自粛警察はどう関係しているのか、そういう話をします。

最後に、「愛国心の行方」と題して、ポピュリズムやヘイトスピーチの問題についての話をします。去年、アメリカの大統領選挙でトランプの支持者が陰謀論に染まって、議事堂に乱入するという事件が起りましたが、日本でも在日韓国・朝鮮人に出ていけと罵声を浴びせるような、ひどいヘイトスピーチをする人がいます。彼らはどうしてそういう行動に出てしまうのか、そういう話をして、最後にまとめという流れで進めていきたいと思います。

まずはじめに、「隔離メシ騒動」の話です。これは私が去年の3月から1年間、ドイツのベルリンで在外研究に従事していたことと関係があります。

去年の3月にドイツに到着したときは、そろそろ危ないなという程度だったんですが、到着して2週間ぐらいするとどんどん状況が悪化してきて、あれよあれよという間にロックダウンになりました。夏頃はわりとマシになって図書館とか大学とかも使えるようになったんですが、11月からもう一度ロックダウンになって、帰国するときまでずっと家にこもる生活でしたから、まあ何のためにドイツに行ったのかさっぱりわからない。仕方なくずっと家で中華料理を作っていたので、料理の腕だけが磨かれてしまったという、そんな感じの残念な1年だったんですが、ドイツでロックダウンを体験したことで、日本のコロナ対策との違いなど、学べたことはそれなりにあったように思います。

それで、今年の3月中旬にドイツから帰国したときの話です。現在もそうですが、コロナ流行国から帰国した人は関空のホテルで3日間隔離です。私もその対象になって、ホテル日航関西空港という、関空の島のなかにあるホテルに泊まることになったんですが、部屋はよかったですけれど、とにかくご飯がひどい。昼食と夕食に出される弁当はフジオフードシステムという、寝屋川食堂とか豊中食堂とか地名のついた食堂を経営している会社が作ったものです。これが「隔離メシ」と呼ばれるもので、揚げ物ばかりで量も少ない。スーパーで398円ぐらいで売っている弁当なんです。

こういう弁当が3食のうち2食出てきて、残りの1食はクロワッサンみたいな全然腹の足しにならない食事です。私は最初からこれはきついと思って、すぐに友人に泣きついてアマゾンで差し入れを送ってもらったんですが、それでもきつい。きついのでツイッターで助けてくれみたいなツイートをしたわけです。そのツイート自体はそれほど批判を浴びずに、私の知り合いでドイツに住んでいる人とかイギリスに住んでいる人とか、そういう人たちに注目してもらっているような状況でした。

一方、同じ日に同じホテルに入居したイギリスのウェールズ帰りの男性がいたんですが、その人のツイートも海外在住の人たちから注目されていて、私と同じ境遇に置かれているのにご飯への反応が違うのが面白くて、ツイッターで話題になりはじめていたようなんです。それをきっかけに、私とその男性もツイッターで連絡をとるようになりまして、別々の部屋で隔離されていてお互い顔を見たこともないけれども、つらいのは一緒ですよねということで意気投合しまして、

食料の差し入れをし合うような仲になりました。ツイッターでは、その関係が第一次世界大戦のときのイギリスとドイツのクリスマス休戦みたいだと、そういう見方をされて大きな話題になりまして、あるサイトで2人のツイートが全部一覧できるような形でまとめられると、そのまとめがわずか1日で40万ビューを記録するという、その日もっとも注目された話題になったんです。

しかし40万人ぐらいに注目されると、ものすごい数の批判がやってきます。私は食事がきついと書いただけなんです。そうしたら、黙って食えとかタダ飯だろとか、そういう批判が殺到したわけです。おまえが好きで海外に行ったんだから文句を言うなといった、自己責任論をバックにしたような発言が多かったんですが、これはコロナが流行しだしてから、あちこちで見受けられる反応のように思います。実は去年の3月、ヨーロッパでコロナの感染が拡大しはじめたときにヨーロッパに留学していた大学生がみんな日本に帰らないといけなくなったんですが、そのときもヤフーニュースなどのコメント欄はもう地獄のような有様でした。好きで海外に行ったのに状況が悪くなったら逃げて帰ってくるのか、迷惑だから帰ってくるなといった、そういうひどい罵声ばかりでした。私もそういうバッシングを浴びまして、これってまさに私がこれまで研究してきたファシズムの仕組みをよくあらわしているんじゃないかと、そう考えました。研究材料が向こうからやってきたような具合で、いろいろと私に批判を寄せてきた人のコメントを全部保存して、後で分析に使おうと思ったわけなんです。

私とイギリス帰りの人との交流が話題になったことで、隔離メシがひどいということが世間に知られるようになったんですが、これはわりと大きな反響を呼ぶことになりました。私のツイートが立憲民主党のある議員の方に注目されて、3月30日の衆議院厚生労働委員会で私の名前や肩書きと一緒に紹介されることになりました。ある種の社会運動のようなことになったわけですが、そうなるとももちろん批判も殺到します。そういう批判には、政府や自治体のやることに異議を唱えるかわりに、それに異議を唱える個人を槍玉に挙げるという傾向を見出すことができます。この隔離メシにしても、税金が投入されているんですから、納税者の一人である私にも文句を言う権利はあるわけです。それなのに黙って食えとかタダ飯だろとか、そういうことを言う。自粛警察にも共通する心理じゃないかと、そう思ったのです。

ということで、「自粛警察」の話に入るわけですが、これからするお話は、みなさんご存じの『はだしのゲン』の町内会長、鮫島伝次郎という人の行動に要約されていると思います。

この人は戦時中、進歩的な考え方を持っていたゲンの一家を非国民だと言って、執拗にいじめていました。ところが日本が戦争に負けた後、この人は政治家に立候補して、自分は戦時中から戦争には反対だった、こんな日本にした政治家はけしからん、そういうことを演説会で語っているわけです。それをたまたまゲンが聞いて、「日本が戦争に負けると今度は戦争に反対していた平和の戦士か、都合がええのう」と言って問い詰めると、本人は痛いところを突かれて気まずそうな顔しています。この鮫島伝次郎って本当にいやなヤツで、読んでいてムカムカするんですが、この人の行動は、今日のお話の内容を非常に典型的にあらわしています。

どういうことかという、この人は戦時中と戦後で言っていることが180度違うので、あまりにも調子のいい偽善者ではないかと、みなさんも思いますよね。しかしある意味、彼の行動は戦時中と戦後で一貫しています。戦時中も戦後も、その時代ごとの正義を後ろ盾にして、それに従わない人を抑圧する。権力を笠に着るとか、虎の威を借りるとか、言い方は何でもいいんですけど、とにかく何か大きな権威をバックにして他人を攻撃し、自分の地位と力を得ようとしている点では一緒です。敵や異端者を攻撃するだけで自分は強者の側に立って権力を行使できるわけで、そういう意味ではこの鮫島という男も大きな顔をしたがる「小さな権力者」の一人にすぎないと言えるのかもしれませんが、重要なのはそのような行動に出る動機です。戦時中は進歩的なゲンの一家が気に食わないから、その憂さ晴らしをしている。戦後は政治家になって権力や富を手に入れたという、私利私欲の追求が中心になっている。一見正義にもとづいて行動しているように見えるけれども、実際には自分の欲求を充足することが動機になっていて、その点で鮫島の行動は戦時中も戦後も一貫しているのです。

この点は後の話でも重要になってきますが、この鮫島という男はもっと上の権力者からこうしろと、何か命令されているわけではありません。彼自身が勝手に上の権威を利用して、自分より弱い人を攻撃するのに使っているだけです。ファシズムというもの、実は上の権力者が下の人たちに無理やり言うことを聞かせているわけではなくて、様々なレベルの人びとがみんな上の方を向いて、その権威を利用して自分の私利私欲を追求するという、そういう構造になっています。この話は後でまた出てきます。

自粛警察の問題を考える上でも、鮫島の行動は参考になります。自粛警察とは緊急事態宣言下の日本で活発化した、自粛要請に応じない者への私的制裁の動きで、みなさんもニュースで頻繁に耳にされたと思います。感染者が出た大学に脅迫電話をかけたり、営業を続ける飲食店に嫌がらせの貼り紙を貼ったりするなどの過激なバッシングの動きが、一時期日本中で発生しました。

なぜこういう動きが生じたのか。ここでも先ほど説明したことが重要です。政府や自治体の指示や要請を後ろ盾にして、これがルールだから従えと他人に同調を強いる、そういう行動が特徴になっています。人に迷惑をかけるなという規範は正義と見なされやすいわけですが、そういう正義をふりかざして迷惑に思える人たちを攻撃し、懲らしめてやろうという行動が暴走していった結果が、いわゆる「自粛警察」です。

そういう行動はわりと日本に特殊な現象です。たとえばドイツにもルールを盾に他人を非難するような行動はあるんですが、政府や自治体によってルールが明確に定められているので、何をしたらルール違反になるのかがはっきりしていて、非難の対象となる行動は限定的です。ところが日本の場合はルールがきわめて曖昧です。政府や自治体は単に自粛を要請しているだけですから、私たちは必ずしもそれに従う義務はないわけですが、それでもルールだから従えと同調を強いるような風潮が生じていますし、ちょっとした行動がルール違反だと勝手に決めつけられて、激しい非難の対象になるといったことも起きています。

たとえば電車のなかでマスクをしていない人がいたとします。ドイツの場合、それを処罰する法律が定められているので、電車のなかでそういう人を見たら、違反行為ですよと批判することができます。日本の場合は何も罰則がなく、政府や自治体が要請しているだけなのに、マスクを着用することが義務であるかのように受け止められ、その義務に従わない者は激しい非難を浴びる。こういったことから、自粛警察の特徴として次の3点を挙げることができます。

1点目は「権威への服従」です。政府など公的な権威による指示や要請を絶対視し、それに従わない者を異端者として犯罪者のごとく排斥します。

2点目は「正義の暴走」です。ある種の正義、これはもちろん括弧つきの正義で、本人たちがそう思っているにすぎないものですが、とにかくそういう正義をふりかざして他者の非を咎め、事実上の処罰を行います。場合によっては、個人情報暴露するなどの過激な行動に出たりもします。

3点目も重要で、「制裁対象の拡大」です。要請に従わない人は、法的根拠がなくても制裁を受けます。たとえば政府が他県への移動はお控えくださいと言うと、法律違反でもないのに県をまたいで移動する人が排斥の対象となって、他県ナンバーの車に石を投げるといった行動が発生するわけです。

法的根拠がなくても制裁を行うような人は、政府や自治体の意向を勝手に拡大解釈して、自分たちが行う制裁を正当化していると見ることができます。その意味で、彼らの行動を動機づけているのは一種の忖度です。

こういう自粛警察のような動きが生じた原因としては、第一に、政府や自治体の危機対応の問題が挙げられます。ドイツのように法律でルールを決めて、これはだめ、これはいいと線引きをするのではなく、あくまでお願い型、要請するだけの対応で済まそうとしたことが最大の原因です。日本政府の緊急事態宣言は、外出や営業の自粛を要請するだけのゆるいものでした。欧米のロックダウンとは対照的で、移動・営業の自由の制約を伴いません。実際には日本でも自由が制約されることに変わりはないんですが、それが法的に根拠づけられていないということです。

第二に、日本政府の自粛要請は個々人の自助努力と自己責任に頼った感染予防にとどまっています。一時期「三密回避」とよく言われましたが、あれなんかがとくにそうです。もちろん自粛したからといって十分な休業補償はありません。これははっきり言うと、政府や自治体が支出をケチっているだけなんです。その根底には、新自由主義にもとづく緊縮財政があります。法的に移動・営業の自由を制約すると、その補償をしないといけなくなりますからね。その補償をしないで済ませるために、自粛の要請にとどめているわけです。

第三に、パニックを防ぐためにとられた検査抑制方針があります。これは今でも続いていますけれど、欧米に比べるとPCR検査の数が1桁、2桁ぐらい少ない状況です。厚生労働省は検査を増やすと無駄に不安を煽るとか、PCR検査の精度が低いとか言って、検査を増やすのをずっと抑制してきました。しかし1年以上たっただんだんわかってきたのは、そもそも日本には欧米のよ

うに大規模に検査を行う余裕がなくて、それを検査に問題があるかのようなことを言って糊塗していたということです。検査をしなければ市中感染がどれほど広がっているかがわからず、適切な感染対策がとれないので、人びとの不安だけが増大していきます。

政府はなんとか不安を鎮めようとするんだけど、自粛要請という曖昧な対策で危機を乗り切ろうとするばかりで有効な対策がとれず、なかなか不安を鎮めることができない、いまだにできていないと言っていると思います。そうするとどういうことが起こるかという、われわれ一般人は電車のなかでマスクをしたり、自分でアルコール消毒をしたりして、自助努力で危機に対処するしかなくなります。こうして不安がどんどん増大していきます。他方で、自粛要請に従ってばかりはられない人も出てきます。飲食店を営んでいる人のなかには、休業補償もないし、店を開けても罰せられるわけでもないの、生活のために営業を続けざるをえないと考える人も出てくるでしょうし、あるいはサラリーマンでも、リモートワークが推奨されてるけれども、会社は出勤してこいと言っているの、仕方なく出勤するという人もいるでしょう。こういう理由で営業や外出を続ける人がいても、それは本人の自由に委ねられるはずのことです。

ところがこういう人がいると、一般人のなかには自分は自粛しているのにあいつは自粛していないじゃないかという、不公平感が生じてしまいます。自粛要請に従わずに勝手な行動をとっているように見える人に対して、お前もちゃんと家で自粛しろというふうに、過度な同調をもとめるようになる。こうなるともう、そういう人を懲らしめてやれという他罰感情が充進するのを抑えるのは難しくなります。出発点には政府の曖昧なお願い型の危機対応の問題があって、それが人びとの不安や不満を増大させる。さらにそうした感情は政府や自治体ではなく横に向かっていって、市民同士でいがみ合うという結果につながっていきます。

もう一つ、こういう事態をもたらした原因として、マスメディアの報道姿勢を挙げることができると思います。コロナの感染を自己責任ととらえて、特定の人びとを槍玉に挙げるような報道が目立ちます。この一年ぐらいの報道をふり返ってみると、最初は中国からやってきた観光客とか、豪華客船でクルーズ旅行を楽しんでいた高齢者とかが非難の対象になりましたが、その後に海外旅行から帰ってきた大学生とか、あるいはライブハウスとか、最近では渋谷などで路上飲みをしている若者とか、そういうふうに次々に非難の対象が移り変わっていることがわかってきます。

こういうバッシングの動きはけっして他人事ではありません。もうすでに誰もがコロナに感染してもおかしくない状況になっているわけですが、それは誰もが思わぬ形で非難を浴びる危険性があることを意味しています。それなのに、感染を本人の過失として非難するという風潮は変わっていません。その結果、感染者や感染リスクの高い行動をとっている人を懲らしめてやれという他罰行動がとめどもなく拡大していくこととなります。

どうして感染を本人の過失として非難しようとするのか。この心理的なメカニズムはけっこう単純で、「公正世界信念」というんですけれど、因果応報みたいな考えにしがみつこうとする人間

の傾向で、不安が強まるとその傾向が大きくなります。感染した人を見て、その人の行動が悪かったから感染したんだと考えれば、そういう行動をしない限りは自分は感染しないと思って安心できるわけです。そういう意味で、感染を本人の過失、自業自得ととらえるような姿勢は、人びとの間で強まっている不安の産物だと言うことができるでしょう。

こういう一連のプロセスを経て、「正義の暴走」が生じます。正義感にもとづく他罰行動が過激になると、そこにはファシズムが口を開けて待っています。ファシズムとは何か、その定義の問題は後で簡単に説明しますが、大事なポイントはここです。

政府や自治体は人びとに外出しないでくれ、営業を自粛してくれと要請しているわけですが、それは結果的に、他人を攻撃するような過激な行動を促進することになります。勝手な行動をしている人はけしからん、懲らしめてやれという他罰感情を募らせた人に対して、公的な権威がそういう感情にお墨付きを与えるという格好になっているわけですね。こうして自粛要請を大義名分にして他人に正義の鉄槌を下し、存分に鬱憤を晴らすような行動が助長されることになります。しかも最近では、政府や自治体他罰行動を煽っているようなふしも見受けられます。具体的には大阪府知事がそうなんですけれど、営業を続けるパチンコ店のリストを公表したりします。最近政治学でよく使われる言葉に「犬笛」という言葉がありますが、権力者が人びとに攻撃をけしかけているわけです。アメリカでもトランプ大統領が差別的な発言をすると、支持者たちがそれに煽られて過激な攻撃に走ったりします。

これはファシズムに典型的な現象で、ナチ時代にも起こっています。1938年11月にドイツ国内で大規模なポグロム、反ユダヤ暴動が発生しました。ちなみに、この事件は一般に「水晶の夜」と呼ばれていますが、最近では「11月ポグロム」という呼び方が一般的になっています。それはともかく、この事件も最初に権力者がけしかけて、それに呼応する形で人びとがユダヤ人への襲撃に走るという、そういうプロセスを経ていたことがわかっています。どういうことかということ、この11月ポグロムのきっかけとなったのは宣伝大臣のゲッベルスという人の演説で、ナチ党の幹部たちに向かって、いまドイツ全土でユダヤ人への報復行動が生じているが、党はその行動を止めないというようなことを言ったのです。ゲッベルス自身はユダヤ人を襲撃しろとは言っていないし、攻撃の命令も下していないんですが、彼の演説を聞いた幹部たちはゴーサインが出たと受け止めて、すぐに全国各地の党員や突撃隊員に指令を出し、ユダヤ人街を襲撃させたのです。つまり、上が命令を出して下に押し付けたのではなく、上の意向を下が忖度して攻撃の命令と受け止め、それを大義名分にして暴行や略奪に及んだというのが実態で、それが多数の犠牲者を出すひどい結果につながったということが最近の研究で指摘されています。

自粛警察がいかにファシズムに似た現象かということがわかったかと思いますが、ここからは私が大学の授業でやってきた「ファシズムの体験学習」の話に入ります。

まずファシズムの特徴についてまとめておくと、これは私が2020年に出した本、『ファシズムの教室』のなかで繰り返し書いていることですが、ファシズムというのは「権威への服従」

と「異端者の排除」、この2つによって共同体を形成しようとする運動だと定義することができます。この「権威への服従」の最も重要なポイントは、指導者の命令に従って集団で行動していると、自分の行動に対する責任感が麻痺して、異端者を排除するような攻撃的な行動にも平気になってしまうという点です。

どうしてそうなるかという、上からの命令に従って行動しているだけだと考えると、何をしようがすべて上の責任になるので、自分の行動の結果に責任をとらなくてよくなるからです。こういう意識の状態を「道具的状态」と呼んでいます。自分は上の道具にすぎないのだから何をしてもかまわないという意識に陥ると、ある種の解放感から無責任な行動に走りやすくなってしまいます。

もう一つ強調しておかなければならないのは、ファシズムは独裁者による上からの強権的な支配というよりも、下からの自発的な協力を動員して成り立っているということです。11月ポグロムがそうであったように、ユダヤ人への迫害全般も公的な権威を後ろ盾にした異端者への攻撃と見ることができます。

ファシズムの体験学習は、私が甲南大学で10年にわたって実施してきた授業で、ファシズムの集団行動を250人ぐらいの受講生全員で実演しながら、その仕組みと危険性を学ぶロールプレイ型の授業です。指導者役の教師と支持者役の受講生全員で敬礼や行進、糾弾を実践して、集団が暴走する怖さを疑似体験する内容ですが、これはもちろんファシズムの素晴らしさを理解するためではなく、ファシズムの危険性を実感してもらうことを目的にしています。甲南大学の社会意識論という講義のなかの特別授業で、半期15回の授業のうちの2回分を使って実施しています。2010年から2019年まで10回実施してきましたが、大阪の某地方政党の代議士から大学にクレームの電話が来た影響で、いま実施を見合わせているところです。社会意識論という講義は、有名な監獄実験などを紹介しながら、普通の人間が残虐な行動に走るのはなぜかを考える内容です。この特別授業に関心のある方は、『現代ビジネス』に寄稿した記事を読んでください。これから概要を話しますが、この記事ではもう少し詳しく説明しています。

なぜこの体験授業をはじめたかという、ドイツ映画『THE WAVE ウェイヴ』を観たことが直接のきっかけです。これはある高校の教師が独裁制の体験授業を実施したところ、生徒たちがそれにのめり込んで暴走していき、コントロール不能になって悲惨な結末を迎えるという、そういう内容の映画です。私は2009年にはじめてこの映画を観たんですが、ファシズムの仕組みがうまく描かれていてとても面白いなと思いました。なぜドイツの人びとはヒトラーに従ったのかという問題を研究者として考え続けてきたので、そういった考察を深めるヒントにもなりました。それで、これを大学の授業で実施すれば、学生にとっても非常に大きな学びになるんじゃないかと思ったわけです。ただし、映画自体がそういう死者が出るような危ない内容なので、これをそのまま真似するわけにはいきません。映画のような結末を避けるためには、慎重な配慮が必要です。

授業でナチスを模倣したパフォーマンスを行うわけですが、それ自体ドイツでは処罰の対象に

なっています。たとえばドイツで「ハイルヒトラー」と挨拶をすると、警察に逮捕されます。そういう倫理的な問題もあるので、授業の実施前に受講生にのめり込みすぎないように注意しますし、途中で耐えられないと感じたら受講をやめることも許可していて、実施した後は学生が勝手な行動をとらないようツイッターでモニタリングもしています。

もう一つ重要なのは、授業のなかで敵役のカップルを全員で糾弾するんですが、その敵役にサクラを用いることです。何も事情を知らない人をいきなり糾弾したら、ショックを受けてトラウマになってしまう危険性があるからです。後でまた説明しますが、ナチスをカッコいいと思ってしまうと困るので、ちゃんとダサいと感じてもらえるように、滑稽な演出も導入しています。この授業に関しては、今年4月にNHK BSの『ダークサイドミステリー』という番組で授業の内容が紹介されましたので、それを観ていただくとわかりやすいと思います。

これでだいたい授業の概要はわかると思いますが、具体的に授業でどんなことをするのかについて、もう少し詳しく説明します。

まず2回あるうちの1回目の授業ですが、1回目はまだ誰も制服を着ていません。授業の最初に、ファシズムにとって指導者の存在が不可欠であることを説明し、私とその指導者、「田野総統」となることを宣言して、全員に拍手で賛同させます。次に、指導者に忠誠を誓う敬礼、右手を挙げて「ハイルタノ」と叫ぶ敬礼を導入します。教室内でこの敬礼と行進の練習を行って、集団の力の大きさを実感してもらいます。受講生全員、250人ぐらいで教室内で一斉に足踏みをすると、ものすごい轟音が鳴り響きます。もちろん下の教室の人にはあらかじめ説明しておかないといけませんが、250人も人間が力を合わせるとこんなにすごい音が出るんだなということがわかります。大事なポイントは、ファシズムにとって指導者の存在は不可欠だけれども、指導者がいるだけではだめで、その指導者を多数の人たちがみんな一致団結して支えないといけない、だから共同体の力が必要だということです。

その後、席替えを行って受講生を分断します。これが指導者への従属を強める効果を発揮します。普段学生は友達同士で座っています。そうすると私が何か指示をしても隣の友達と顔を見合わせながら聞くので、その指示の力が減殺されてしまいます。しかし席替えをして受講生を分断すると、横に座っているのは知らない人です。これによって生まれる孤立感が、一人ひとりの指導者への従属を強めるわけです。次に、指導者と支持者からなる集団、「田野帝国」の目に見える標識として、制服とロゴマークが重要であることを説明します。

これはどういうことかということ、共同体の力、団結の力というのは、たしかに250人で敬礼や行進をすると実感することができますが、そういう行動をしているときにしか感じられない。行動をしなかったらすぐに消え去ってしまう。ところが私たちの社会には、そういう共同体の力を可視化・永続化させる仕掛けがあります。その一つが制服です。同じ制服を着ているだけで同じ共同体に属しているということが一目瞭然とわかるわけです。ロゴマークもそうです。もちろんナチスも同じ制服を着て同じマークをつけていました。

こういうことを説明した上で、翌週の授業に指定の制服、白シャツとジーパンを着てくるように伝えます。おそらくみなさんも、大学の授業で翌週は白シャツとジーパンを着てくるように言われたら、ちゃんと着てくる人は2割、3割ぐらいしかいないのではとお考えかと思いますが、実は2010年にはじめてこの授業を実施したときから、なんと95%以上の人が着てきました。いまの若い人はそういうことに全然抵抗がないんですね。高校まで制服を着ていたぶん嫌だったはずなのに、大学の授業に制服を着てくることに抵抗がないどころか、とても楽しそうな様子です。何か変わったことをして面白いう、そういう意識なんだと思います。

2回目の授業で、制服を着用して出席した受講生に同じように敬礼と行進の練習をさせると、1回目するときとは迫力が全然違います。声もとても大きい。練習をした後にいったん着席してもらって、前の週の復習をします。私があれば板書しながら前回の授業のまとめをするんですが、このときに事前に用意したサクラの学生に私語をして授業を妨害してもらいます。一度注意しても私語をやめないの、二度目に両脇の学生に「そいつを前に連れてこい」と指示して前に連れてこさせて、「私は田野総統に反抗しました」と書かれたプラカードを首にかけて、壇上に立たせます。見せしめのためにこういうことをやるわけですが、みんなこれは芝居だとわかっているわけです。授業全体がそうなんですけれど、このときもいかにもわざとらしい演出なので、受講生はどうせヤラセだと気づいています。それにもかかわらず、大半の学生が固唾を呑んで様子を見えています。自分がこんな目にあわされたら嫌だなと思っているのか、そのあたりはよくわかりませんが。

これが終わった後に、全員でロゴマークを決めます。私がお場の思いつきで黒板にA案B案C案を書いて、受講生に拍手で一つ選んでもらい、そのマークをガムテープの切れ端にマジックで書き、胸ポケットのところに貼り付けてもらいます。それからもう一度教室内で敬礼と行進の練習をするんですが、このときに敵役のカップルを糾弾する「リア充爆発しろ」という掛け声も練習します。「リア充爆発しろ」というのはネットスラングの一つで、ネットに詳しくないと知らないかもしれませんが、「リア充」というのはリアルが充実しているという意味で、具体的には彼氏彼女がいる人のことを指します。リア充は消え失せると、幸せそうなカップルに憎悪をぶつける言葉です。

この後、屋外のグラウンドに移動して整列し、もう一度「ハイルタノ」の敬礼や隊列行進をした後、いよいよ最大の山場であるカップルの糾弾を行います。グラウンドの脇にカフェのテラスがあるんですが、そこに2組のカップルが座っています。先ほど説明したように、これはサクラです。本当に付き合っているわけではありません。このテラスに座っているカップル2組を全員で取り囲み、私の拡声器の号令で一斉に「リア充爆発しろ」と叫んで糾弾するわけですが、事前に指示した通り、カップルは20回ぐらい糾弾されると退散していきます。

この2組のカップルが退散した後、3組目のカップルの糾弾に移ります。このカップルは少し離れたところにあるベンチに座って膝枕をしているんですが、ゲームでいうラスボス、最強の敵

のような位置付けで、これも同じように全員で取り囲んで「リア充爆発しろ」と糾弾して退散させます。

そのときの様子を写真で見るとわかりますが、グラウンド周辺にはけっこう野次馬が集まっています。これは授業のことを告知したから集まっているわけではなく、グラウンドの方から何か大きな声がして面白そうだから見に来ているだけです。こういうふうには野次馬を惹き寄せてしまう効果は事前に想定していなかったことなのですが、2回に1回ぐらいはそういう面白半分の野次馬のなかから数人の男子学生が勝手に加わってきて、受講生と一緒に「リア充爆発しろ」と叫んだりします。これはちょっと怖いとは思いましたが、もっと怖いのは受講生の意識の変化です。自分たちは授業でやっているんだから部外者がふざけて入ってくるな、と思うわけです。自分たちがやっていることは正しいことなので、面白半分でふざけてやるような人は許せないという意識に変わっていて、そこが非常に恐ろしいところです。

体験学習に参加した受講生は、教師に指示されるまま集団に合わせて行動しているうちに、本来なら良心が咎めるような悪行に加担することになります。もちろんこの授業の目的は、その過程で受講生自身を含む集団の意識がどう変化するかを冷静に観察し、ファシズムの危険性を認識してもらうことです。2回目の授業の最後に感想のレポートを書いてもらっているのですが、これを読むと、ほとんどの人が授業に参加するなかで意識が変化したことを実感している様子がかえります。最初は何の罪もないカップルを糾弾するのはよくない、かわいそうだと思っているのですが、やっているうちにどんどん気持ちが高ぶっていき、最終的には何か達成感を得たような、誇らしげな気持ちになってグラウンドから教室に戻ってくる。行きは恥ずかしいと思っているのに、帰りは人の目が気にならない。そういう意識の変化が生じていることがわかります。

2回の授業が終わった翌週の3週目の授業では、この学生に書いてもらったレポートをもとに、デブリーフィングという受講生への説明を行います。デブリーフィングというのは、心理学の実験をしたとき、実施後に被験者に実験の意味を説明するものです。大きく3点に分けて説明するわけですが、レポートもこの3点を書けているかどうかを見て評価します。私の授業では、最初から答えを教えるのではなく、まず学生に自分で考えてもらって、その上で解説を行うようにしています。この体験授業でも、受講生自身にどんな意識の変化があったかを考えてもらい、その後に私の解説を聞いて、自分が体験したことが社会学や心理学でどう論じられているのか、なぜそういうことが起こるのかを理解してもらおう。そうすると、受講生はみずからの体験を客観的にとらえ直して、これはこういう意味で危ないんだなど、ファシズムの危険性の理解につなげることができるようになります。

最近よく取り沙汰されるアクティブラーニングの一種だとも言えますが、私がとくに重視しているのは、受講生一人ひとりに自分の体験を深い学びにつなげてもらうことです。この授業に参加して一緒に叫んだりすると楽しいし、達成感が得られるわけですが、それだけで終わってはいけません。そういう高揚感と解放感にこそファシズムの危険がある、そこに気づいてもらうことが

最大の目的です。この授業に参加してファシズムの怖さを体験した人は、今後どこかで似たような状況に遭遇したときに、これはあの授業でやったことと同じではないかと気づいて、周囲に流されずに済むはずです。こういう内面的な歯止め、ファシズムに対する抗体を作り出すという意味で、この授業にはワクチンのような効果があるのではないかと考えています。

さて、デブリーフィングではファシズムの危険性、集団行動が暴走する仕組みとして、次の3点を説明しています。

1点目は「集団の力の実感」です。途中から叫ぶのが恥ずかしくなくなったとか、リア充を排除して達成感が湧いたとか、そういう感想がこれにあたるんですが、集団で行動しているうちに自分の存在が大きくなったように感じて、集団に所属することへの誇りやメンバーとの連帯感、非メンバーへの優越感を抱いて、徐々に一体感を強めるということです。

さらにいうと、集団の一員となることで自我が肥大化して、自分たちの力を誇示したいという感情に満たされるようになります。受講生に書いてもらったレポートにも、見られている方がやる気が出たという内容のものがあありますが、授業の参加者はいつのまにか気が大きくなって、自分たちは何でもできるという全能感に支配されるようになります。制服やロゴマークなどの単純な仕掛けが、そうした感情を促進するというのも重要です。

2点目が「責任感の麻痺」で、3点のうち最も重要なポイントです。これも先ほど少し説明しましたが、指導者に指示されたから、みんなもやっているからという理由で、授業の参加者は個人としての善悪の判断をしなくなって、普段なら気が咎めるようなことも平然と行えるようになります。上からの命令に従い、周囲に同調して行動しているうちに、自分の行動に責任を感じなくなるのです。

これは権威への服従と集団への埋没が人びとを道具的状态に陥れ、無責任な行動に駆り立てていく仕組みとして理解することができます。上からの命令に従って、しかも周囲に同調して行動していると、自分が何をしても責任をとらなくていいという意識になって、通常ならありえないようなひどいこともできてしまう。

3点目は「規範の変化」です。これは野次馬のなかから集団に加わってくる人に腹が立ったという、先ほど紹介した感想がとくにそうなんですが、何を正しいと考えるかという規範が変化することを指します。途中から叫ぶことに慣れてしまったとか、ちゃんと声を出していない人に苛立ったとか、そういうことをレポートに書いている人も、最初はこんなことはしたくない、恥ずかしいなどと思っていたわけです。ところが教師に言われたことをやっているうちに、隣で声を出していない人にちゃんと声を出せと言いたくなってくる。規範が変化しているのです。最初はこんなことはおかしいとか、普段の自分の規範で判断しているんですが、いったん集団で行動するようになると、しだいに集団の規範に支配されるようになって、その規範に従っていない人の方がおかしいと思うようになるわけです。

これは参加者が上からの命令を遂行するという役割に順応し、集団の規範を自発的に維持する

ようになることを示しています。集団で一緒に行動することが当たり前になって、それを自分たちの義務のように感じはじめる。そういう変化が生じるのです。

体験学習で何を学ぶことができるのか、その意義をまとめておきましょう。

最も重要なのは、同じ制服を着て指導者に忠誠を誓い、命令に従って大勢で敵を攻撃するだけで、人はたやすく高揚感や解放感を味わうことができるということです。

ファシズムに従う人びとというと、独裁者に無理やり言うことを聞かされている家畜のような存在と考えがちですが、必ずしもそうではありません。むしろ上からの命令を大義名分にして、普段なら許されないようなこと、たとえば気に食わない相手に罵声を浴びせたりすることができる状況になっています。大きな権威を後ろ盾にすると、好き放題に行動できる面もある。だからある意味で気持ちがいいし、解放感というか、ある種の自由のようなものが感じられるのです。通常であれば許されないことが許される。そこではどんなに暴力的な行動に出ようと、上からの命令なので自分の責任が問われることはありません。普段は抑圧されている攻撃衝動や他罰感情にお墨付きが与えられて、それを誰かにぶつけることが正義になります。

普段どこかでカップルが仲良く歩いているのを見て、「リア充爆発しろ」などと罵声を浴びせる人はいません。そんなことしたら、本人が白い目で見られるだけです。ところがこの授業のなかでは、そうすることが許されています。それどころか、私がそれを煽ったりもします。カップルに面と向かって「リア充爆発しろ」と言える機会はこの先二度とありませんよと。教師が受講生に大きな声を出すよう指示すると、みんな大きい声を出すようになるんですが、これは権威がお墨付きを与えることで、無責任な行動が助長されることを示しています。そういう誰もが飲み込まれかねない仕組みにこそ、ファシズムの危険な魅力がある。それがこの体験授業の最大の教訓です。

この授業で学べることは、現代の様々な問題を考える上でも役立ちます。とくに近年世界中で注目されているポピュリズムの問題なども、かなりの部分までそれで説明することができます。ということで、ここからポピュリズムやヘイトスピーチの話に移ります。

みなさんもよくニュースで耳にするポピュリズムとは何かということですが、まずそこから話をしましょう。アメリカのトランプ現象やヨーロッパの極右排外主義運動が代表的ですが、ポピュリズムの最大公約数的な特徴は、自分たちを人民の意志の代表と見なして、その意志の実現を阻むあらゆる制約を打破しようとする点にあります。人民・民衆の意志を絶対視するという意味においては民主主義的な運動ということができそうですが、他方で民主主義に敵対するような特徴も持っています。

民主主義というのは多数決で決めるというだけではなくて、それを制約する制度的な仕組みがあってはじめて成り立つものです。人民の意志、多数派の意志が絶対ということになると、その意志が少数派の権利を侵害するような非人道的なものであっても、すべて通ってしまいます。ですから普通はそういうことにならないよう、民意の暴走を食い止める安全装置があります。たと

えばドイツには憲法裁判所というものがあって、多数決で決まったことでもこれは憲法違反だからと却下したりする仕組みがあるわけです。民主主義というのは一般に考えられる以上に複雑なシステムで、それを可能にするためには必ず司法やジャーナリズムなど、非民主主義的な制度によるチェックが必要です。それがあってはじめて人びとの自由が担保されているわけです。

ところがポピュリズムは多数派の意志や人民の意志を絶対視するので、そういう意志の実現を阻むものすべてを破壊しようとしています。彼らにとって最大の敵は、人民を抑圧・搾取しているエスタブリッシュメント、つまり既得権益層ですが、そういうエリートたちの支配を可能にしている司法やジャーナリズム、さらにはその庇護のもとで特権を享受しているとされるマイノリティ、移民や同性愛者なども攻撃の対象となります。ポピュリズムというのは、そういう人びとへの憎悪や敵意を煽り、その排除に向けて大衆の感情を動員しようとする運動、つまり多数派の絶対的な支配を追求する運動だと、ひとまず定義することができます。

ポピュリズムについては研究者の間でも様々な見方がありますが、この運動の特徴として私が最も重視しているのは「ポリコレへの反発」です。

「ポリコレ」、つまり「ポリティカルコレクトネス」という言葉、直訳すると「政治的正しさ」という意味ですが、日本では一般に「戦後民主主義的な価値観」と呼ばれるものが、これにあたります。差別はいけないとか、戦争はいけないとか、一部の人にはきれいごとと感じられる規範、戦後の民主主義社会の基盤となってきた考え方、そういうリベラルで良識的な価値観は、ポピュリズムや極右排外主義運動の支持者たちには、自分たちの感情を抑圧するだけの空虚な高説とされている。それに対して、彼らは自分たちを縛る制約を打破して、堂々と本音を表明しようとします。マイノリティを差別して何がいけないのか、彼らが優遇されているせいで自分たちはみじめな思いをしているのではないか、そういうことを主張するのです。差別はいけないという価値観が支配的になっている状況のなかで、一種のタブー破りとして少数派への憎悪や敵意を表明する。彼らはそこに快感を見出しているわけです。ポリコレ的な価値観が自分たちの純粋な感情を押さえつけ、少数派に不当な特権を与えていることに対する不満、それがヘイトスピーチに加わろうとする動機になっています。

日本的な文脈でいうと、そういう人たちにとって在日韓国・朝鮮人は「反日」で、朝日新聞をはじめとするマスコミは彼らに手を貸す「売国奴」だということになります。朝日新聞はポリコレ的な価値観を広めることによって、「反日勢力」に憤る自分たちの純粋な愛国心を抑えつけている、われわれは日本を愛するがゆえに敵対勢力の脅威から国を守ろうとしているのであって、そのどこが悪いというのか。そういう義憤に満ちた感情が、彼らの攻撃的な言動の背景にあります。そのことは近年のある事件からも明らかです。

2017年に弁護士会が朝鮮学校への補助金の支給を求める声明を出したことをきっかけに、ネット上の匿名の人たちによって複数の弁護士に大量の懲戒請求が送られるという事件が起きました。弁護士たちは懲戒請求を送ってきた人びとの実名を明らかにして損害賠償を請求し、すべて

勝訴したのですが、これによってどういう人が懲戒請求をしたのかがわかりました。新聞報道によると、多くの人が軽率な行動だったと反省の弁を述べていますが、そういう行動に出た理由については、ほとんどが義憤に駆られたからだと説明しています。ある女性は、懲戒請求を送ることが日本のためになると思い込んでいた、「反日勢力」の脅威に対して自分は立ち上がったんだと、そういうことを述べています。しかしこの人の言っていることを記事で読む限りだと、本当にそういう勢力の脅威が存在するのかということちゃんと考えているようには思えないんですね。さらにいうと、懲戒請求という手段に訴えるのが適切かということも深く考えていないようです。彼女は有名ブロガーの呼びかけに応じる形で、ほとんど反射的に懲戒請求を送ったと言っています。

巨大な陰謀の存在を知って憤激に駆られ、衝動的に自衛に立ち上がる、そういう経緯で懲戒請求を送った人が多かったことがうかがえます。彼らにとって重要だったのは、自分がどれだけ怒りを感じ、使命感を呼び覚まされたのかということです。ポリコレによって抑圧されてきた愛国心に目覚め、敵対勢力への攻撃のなかで何の制約もなくその愛国心を表出することが、彼らの動機になっていたと考えられます。しかもそうすると、敵への攻撃は絶対的な正義となって、内面的な歯止めが効かなくなってしまいます。敵は自分たちの愛する国を破壊しようとしているわけですから、その打倒をめざす行動は無条件に正しいことと見なされて、そういう行動が適切なのかを冷静に考えることは難しくなります。

こうして「正義」が暴走していきます。ヘイトスピーチの参加者たちは、日本のためという大義名分のもと、数の力で反対派や少数派を圧倒するような行動をとります。それは自分の攻撃衝動を相手にぶつけながら、堂々と正義の執行者を演じることを可能にしてくれます。そこで鍵となるのが、これまで何度も説明してきた「権威への服従」の仕組みです。この場合、権威というのは多数派の意見という意味になりますが、それを後ろ盾にして敵を攻撃するという行動は、自分の欲求を何の制約も受けずに充足する自由をもたらします。そのカタルシス的な快感にこそ、ヘイトの魅力があると言えるでしょう。ポリコレによる抑圧に抗して存分に自分の感情を表明することの魅力、それがヘイトスピーチの動機になっているのです。

在日韓国・朝鮮人に罵声を浴びせる人たち、ヘイトスピーチの参加者たちを見て、私たちはなんてひどいことをするんだと眉をひそめるわけですが、そういう行動をけしからんというだけでは問題は解決しません。私たちはまず、当事者にとってそれがいかに魅力的なのかを理解する必要があります。その上で、彼らが攻撃的な行動に走ることがないように、何らかの歯止めをかけなければいけません。私の体験授業もそういう目的のもと、一種のワクチンとして実施してきたわけです。

「正義の暴走」を防ぐには、その仕組みを理解することが先決です。最も大事な点は、権威に服従して正義の執行者を演じると、他者への攻撃に躊躇がなくなるということです。そうすると自分の行動に責任を感じなくて済むので、何をしてもかまわないという一種の解放感に満たされま

す。こうして多数派の共同体を形成しようとするのがファシズムであり、ポピュリズムでもあるわけですが、ヘイトスピーチや自粛警察の問題も、だいたいこれで説明できるでしょう。今日お話した様々な問題はいずれも、権威への服従の仕組みが根底にあって、上の権威に従っている人間は無責任な行動に走りやすいというところに危険性があります。この共通の仕組みをおさえおくことが何よりも重要です。

現在コロナの流行で人びとの不安が強まっていて、そうした不安や不満を養分にしながら自粛警察のようなファシズム的な動きが拡大しつつあります。そういう動きが過激な行動につながらないようにするにはどうしたらいいのか。私がとくに重要だと考えているのは、健全な愛国心をいかにして育むべきかということです。これはみなさんも家でテレビを観ているとお気づきになるかと思いますが、夜8時台、9時台ぐらいは「日本スゴイ」系の番組が多くなっています。日本の大工の仕事はすごいとか、世界が称賛する日本のナントカみたいな番組で、テレビだけでなく雑誌などでもそんな内容が目立ちます。日本の素晴らしさを自画自賛したいという、その気持ちは理解できなくはないんですが、それはポリコレ、戦後民主主義的な価値観への反発と表裏一体です。こういう風潮が行き過ぎると、日本を賞賛するのが当然で、悪く言う人は非国民だというような、不寛容な空気が醸成されかねません。愛国心が危険な方向に向かわないよう、その健全さをどうやって担保したらいいのか。難しい問題ですが、考え続ける必要があると思います。

以上で今日のお話を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

2021年7月24日 大阪狭山市文化会館 SAYAKA ホール にて